



Title	クオリア嫌いのいま
Author(s)	手塚, 知訓
Citation	年報人間科学. 2007, 28, p. 171-176
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◇書 評◇

クオリア嫌いのいま

Daniel C. Dennett

*Sweet Dreams: Philosophical Obstacles to a
Science of Consciousness*

MIT Press, 2005

手塚知訓

心を科学によって理解することは可能か。このことを問うにあたって哲学者が検討してきた重大なテーマとして、「意識」が挙げられる。われわれの心的生活において現れる、傷口の痛みやコーヒーのほろ苦さといった感覚的なものは、どうやらわれわれの身体の状態や脳状態と深い関わりがあるらしい。だが、これらの主観的な状態は、身体状態や脳状態という客観的な状態とどのような関係にあるのだろうか。このようにしてひとは、いわゆる心身問題に行き着くことになる。

二十世紀の後半は、この問題に対して、多大な科学的知見をもとにしたアプローチが試みられた時代であった。神経科学や人工知能研究、進化生物学などが、いわゆる認知科学の一部として、心を解明するために大々的に導入された。このような分野横断的な諸研究によって、心もまた神秘的な装いを取り去られる運命にあるのではないか。哲学者たちは、この予見が正しいかどうかを真剣に検討してきたのである。本書の著者である Dennett も、そのような哲学者のひとりに数えられる。彼は十五年前に *Consciousness Explained* という本で、意識の問題に取り組んだが、本書は彼が再び意識の問題をめぐる活況の中に身をおき、自説の擁護とリニューアルを図ったものである。

本書は八章から成っている。まずは大雑把な紹介からはじめよう。一章「ゾンビの予感：ある直観の絶滅？」では、意識についての計算主義的・機能主義的理論を目指す、という Dennett の基本路線が

確認され、それと対立する論者の立場が概観され、対立点が明らかにされる。第二章「意識への三人称的アプローチ」では、意識を研究するさいの Dennett の方法、「ヘテロ現象学」を素描し、その擁護がなされる。第三章「意識という「マジック」を説明する」では、デジャ・ヴ（既視感）現象を神経科学的に説明する仕方を示したのち、意識現象のそのような取り扱いに反対する者の立場を紹介して、それらが手品のトリックのごとき「概念的なごまかし」に類するものである、と論じる。第四章「クオリアが人生を生きるに値するものになっているのか？」では、「内在的な主観的状态」が何らかの实在的性質であるという考えに挑戦している。第五章「ロボメアリが知っていること」では、Jackson の知識論法を再評価した Graham と Horgan の議論を取り上げ、それが根拠のない直観に基づいていると論じる。そして、Jackson のメアリが驚かないでいられることがいかにして可能かについて、「ロボメアリ」の思考実験を提示する。第六章「われわれは意識を既に説明しているのか？」では、意識の科学が主体を説明するときのやり方、つまり想像された中枢執行部を構成要素となる部分へと分析する仕方を擁護し、意識を研究する者にとって重要なことは、クオリア、現象性、われわれとゾンビの間に想像可能な差異、などと装って入り込んでくるものが、既に説明されているものなのだということを認識することである、と主張する。第七章「意識のハファンタジー・エコー／理論」では、多元草稿

モデルからアップデートされた彼の意識観として、「脳の中の噂」（「大脳の名声」）モデルやハファンタジー・エコー／理論と彼が呼ぶものを提示する。第八章「意識：それはハ本当の＼お金にしているら？」では、Dennett が今まで何度か追求してきた戦略であるが、意識の实在性を問おうとするわれわれの性向を萎えさせることが意図されている。

全章概略を簡単に述べれば以上のようになるが、本稿で特に取り上げるトピックは、一章に見られる機能主義と計算主義の関係についての箇所、第二章における三人称的アプローチの確認と、ゾンビの存在を主張する論者との論争、五章の知識論法をめぐる箇所、に限りたいと思う。

まず、一章の機能主義と計算主義の関係についての箇所について。Dennett は意識を説明するときに、はっきりと計算主義ないし「強い AI」の立場を堅持しようとする。認知科学の最初期以降、特に際立ったブランドの機能主義的ミニマリズムが競合のうちにあったが、その考えとは、心臓であるとは基本的にポンプであることであり、そして血液を傷つけずに必要な汲み上げをやる限りにおいて、原理的には何でできていてもよい、という考えである。よって心は根本的には、実際に有機的脳に実装された調整システムであるが、
、、、、、、、、

同じ調整機能を計算できるものなら何でも、同じように寄与するであろう。脳の現実のモノ・シナプスの化学、神経細胞の偏光除去におけるカルシウムの役割、などなどは無関係なのである。この提案によると、脳の結びつきという、下にあるマイクロアーキテクチャでさえ、無視することができる、とされる。

この立場は一部の論者から、生物学や神経生理学の成果を無視するものとして批判されてきた。近年の神経科学の成果は、「細部を愛する人たち」の勝利というべきものではないか。このような印象が広まったのである。

だが、これは誤った考えにすぎない。神経科学が述べることは確かに重要である。だがそれは、神経科学が発見する神経モジュールや化学的メッセンジャーといったものが、機能的役割を持つというその理由によっているからなのである。われわれが神経科学に注意を払わなければならないのは、ニューロンが計算論的役割を果たすがゆえである。神経科学が重要かどうかの対立は、重大な経験的対立ではあるにせよ、それは機能主義と反機能主義の間の対立ではない。

だが、神経科学者や心理学者の中には、哲学者たちが論じているクオリアやゾンビや逆転スペクトルといったものを、自身の反コンピュータ的・反AI的なイデオロギーのための武器にすることができ、と考えている人がいる。単純化された計算主義への非難が、哲学者たちの論争の翻訳であるかのように思っている人がいる。このことについて Dennett は、学際領域におけるミスコミュニケーション

ン以外の何物でもない、と診断する。こうして彼は、本書の以降の部分で、クオリアや一人称的視点といったものについての哲学者たちの論争が、果たして何なのかを見定めることへと向かっていく。

次に、二章におけるゾンビの存在を主張する論者との論争であるが、ここでは特に Dennett の三人称的な方法を簡単に述べたあとに、Dennett と Chalmers との論争に注目することにする。

Dennett は、意識の科学の方法論として、「ヘテロ現象学」という方法論を採る。彼によれば、ヘテロ現象学がやることは、内面性や主観的体験を正當に遇し、かつ、科学的方法論とも調和するような仕方では、「意識の理論が説明すべきデータ」を組織化することである。

具体的にヘテロ現象学のデータとは何であろうか。彼によれば、ヘテロ現象学のデータとは、主体の内部や外部において起こる、全ての化学的な・電気的な・ホルモンにかかわる・聴覚にかかわる・・・などの物理的出来事のことである。そしてこれらの出来事のうち、われわれはひとつのデータの流れに対し、特別な扱いを施す。

つまり、聴覚的な圧力波や、唇の動きといった、われわれの信念（その他の態度）報告の一部をなす物理的出来事に、志向的スタンス (intentional stance) に基づく解釈を施すのである。志向的スタンスとは、システムのふるまいを予測・説明するために、システムを合理的行為者であると仮定する戦略のことである。

あるシステムに対して志向的スタンスをとるとき、われわれはそ

のシステムが意識を備えているかどうか（実は意識なきゾンビなのではないか）といったことには沈黙し（括弧に入れて）、その主体の「ヘテロ現象学の世界」を記述する。そのヘテロ現象学の世界には、その主体の意識の流れに現れる心的イメージ・音・におい・感じ、といった品目が現れる。志向的スタンスによって解釈された信念において表明される、これらの品目のについての報告が、意識の科学が説明すべき事実に加わる、というわけである。

この方法論は確かに三人称的視点を徹底した立場であり、クオリア愛好者がこれを批判しようとするであろうということは、想像に難くない。例えば Chalmers はクオリアを欠くゾンビと意識をもつわれわれの違いにこだわってみせる。彼は次のように言う。

私は意識的であるという私の信念の正当化は、私の認知的メカニズムにのみ存するのではなく、私の直接的な証拠にも存している。（Chalmers のウェブサイトにおける Searle への応答より。

<http://consc.net/discussions.html>)

Chalmers と zombie-Chalmers は完結した物理学において仮定された下位性質をまったく同じくする、とされているので、ヘテロ現象学的な双子であることになろう。彼ら二人を解釈するとき、両者には何の違いも見出せないはずである。問題は、さきの引用部の「直接的な証拠」のところである。Chalmers は自分自身がゾンビではないと熱烈に信じているのだから、ゾンビの方もまたそう信じているはずである。この Chalmers は、自分の信念は彼の意識という直接的な証拠に基づいており、ゾンビの信念はそうではないと主張し

なければならない。両者とも誠実な報告であるにもかかわらず、である。このことが奇妙なのである。

五章の知識論法をめぐる箇所について。知識論法とは、1982 年の Jackson の論文で提示された、超人的な色科学者メアリをめぐる思考実験である。白と黒のみの世界で生きるよう強制されたメアリが、色を初めて目にしたとき、色について科学が教えてくれるすべての知識をもっていたとしても、彼女は驚きを示さだろう。よって、科学が提供するすべての知識だけでは不完全なのである、と論じられる。

この思考実験に対する Dennett の態度は、*Consciousness Explained* の頃から変わっていない。彼に言わせればその思考実験は、単に直観を汲み出しているだけなのである。メアリの思考実験においては、彼女が驚くことはまったく確実なこととして受け取られることになるが、この点になぜ疑いをかけないのか、と Dennett は言う。彼女はその神経科学的全知ゆえに、色を持った対象が提示されたときに自分がどんな思考をもつかを知っている、ということになるかもしれないではないか、と。

これに対して、Graham と Horgan が、知識論法的重要性を再度訴える論文を発表した。より詳細に言えばこうである。近年の意識の唯物論的理論に従うと、メアリが驚くはずであるということを説明できない。メアリが驚くことを説明できない理論（Graham と Horgan はそれらを「薄い唯物論」と呼ぶ）は不十分であり、「厚みのあ

る唯物論」が目指されなければならない、というのである。彼らは Tye による現象的性格についての理論 (PANIC 理論) を取り上げ、それによれば現象的性格が人間の認知的摂理における機能的／表象的役割であることを確認した上で、その性格はメアリの科学的全知のゆえに既に理解されたものとなってしまふ、と主張する。

Dennett の目からすれば、これは再び直観に依拠しているに過ぎない。彼はひたすら、メアリが驚くことを論証するように求める。Graham と Horgan は、「(Tye の理論では) 明白な現象学的事実に適切な理論的便宜を提供することができていない」と言うだけで、明白な現象学的事実の根拠を提示してはいない。

知識論法をめぐるこのような状況を見て、Dennett は、メアリがなぜ驚かないでいられるのかを説明する方策を採る。その方策が、色科学者メア리를ロボットに変換した「ロボメアリ」の思考実験である。「ロボメアリ」とは、色視覚を備えたロボット・マーク 19 の、ビデオカメラだけを白黒カメラに変えたマシンである。ロボメアリはその状態で、マーク 19 の色視覚の仕組み、色のコード化システムについての知識のすべてを獲得する。その多大な知識を用いて、彼女は、白黒カメラからの入力をカラー化するコードを書く。そのコードによる補綴のおかげで、彼女は、ふつうの熟れたバナナを見上げたときに「黄色に見える」ようになる。さて、こうなった後に、彼女にカラーカメラがインストールされた！このとき彼女は何に気づくのか？何も気づかない。彼女は色を見ることがどういうことなのかを既に知っていたのである。この Dennett の筋書きに対し、多

くの人はこう言いたくなるかもしれない。「ロボットは色経験をもたない。ロボットにクオリアはない。これは色科学者メアリについての物語と同じトピックについてではありえない」と。しかしこの主張は、もっとも露骨な論点先取となろう。われわれはある種のロボットなのである。ロボメアリの筋書きを無関係なものとして扱う人々は、唯物論の誤りを論じたてているのではなく、ただそう想定しているのである。こうして Dennett は、クオリアの存在を論じる人々を、パラドクスの状況に追い込もうとするのである。

以上、本書の内容をいくつかのトピックに限って紹介してきた。ここで、ひとつ評者としてのコメントを述べたいと思う。

それは、Dennett が攻撃対象と定め、態度を表明した立場が、限られすぎているのではないかと思われることである。確かに、Chalmers に対抗する議論を見れば、彼の立場は一定の説得力を有しているように私には思われる。「内なる心」という伝統的な図式を下手に崇め奉ると、他我問題にはまり込むことになってしまいうだろう、と私も予期しているからである。だが、彼の立場の明確さを支えているものは、彼が自らのルーツとしてもつ行動主義的な側面(ちなみに彼の師は論理的行動主義者として著名な Ryle である)によるものではないか。では、彼の機能主義的な側面は、現象的经验の実在性について何をもたらすのだろうか。Dennett は確かに機能主義の大枠の考えを受け入れているが、機能主義の旗印のもとに集まっている論者たちが現象的经验の実在性について採る態度

は決して一枚岩ではないはずである (Harmanなどを参照)。おそらく、そのような機能主義者たちは「意識の科学への哲学的障害」ではないであろうにしても、彼らの見解と Dennett との相違は相当にあるだろう。Dennett は本書で、Graham と Horgan が Tye の見解を批判したことに言わば乗っかって、最近の意識の哲学に見られる別の立場との相違をあまり見ていないのではないか、と思われる。

本書で提示された Dennett の立場は確かにクオリアについての「極端な」立場であり、多くの人がそれに賛同できるかどうかは、私には分からない。だがそれでも本書は、当代きってのクオリア嫌いの目に映る意識の論争の姿を明確にしてくれている本として、一読の価値をもったものであろう。